情報数学C

Mathematics for Informatics C

第2回 線形連立方程式の直接解法 (ガウスの消去法、ピボット選択付きガウス消去法, LU分解,コレスキー分解)

> 情報メディア創成学類 藤澤誠

情報数学C (GC21601)

授業の進め方

- 1. その回の講義で対象となる数式(解きたい数式) を提示して説明
- 2. 解くためのアルゴリズムの説明
- 3. 実際のコード例を使った説明 コード例はgithubに置いてある

https://github.com/fujis/numerical

授業用資料はWebページに https://fujis.github.io/numerical/

今回の講義内容

■ 今日の問題

- 数学での解き方とガウス消去法
- ピボット選択
- LU分解とコレスキー分解

今回の講義で扱う問題

Ax = b

今回の講義で扱う問題

線形連立方程式(線形システム)

$$Ax = b$$

$$2 \pi t \geq \cdots$$

$$\begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} e \\ f \end{pmatrix}$$
展開すると \cdots

$$\begin{cases} ax + by = e \\ cx + dy = f \end{cases}$$

中学数学で見慣れた連立方程式

この授業ではベクトルは太字(x,bなど), 行列は大文字(Aなど)で表す

今回の講義で扱う問題

線形システムはどんなところで使われる?

物理

流体力学のナビエ・ストークス方程式や電磁 気学のマクスウェル方程式などを解くために

工学

制御工学でシステムの状態を表す状態方程式. 出力方程式が線形システムになることが多い y = Cx + Du (x:状態変数,u:入力,y:出力)

情報

データ解析における最小自乗法で将来予 測,画像処理でのオプティカルフローの計 算、CGでの曲線・曲面フィッティングなど

基本的に多変数の問題の場合, 最終的に 線形システムを解くことになることが多い

変数表現

n元線形連立方程式の要素の表し方

nが大きくなるとx,y,zでは変数が足りなくなる

 $\Rightarrow x_1, x_2, x_3, \dots$ のように**添え字**を使って表現

$$\begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} & & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} & \dots & a_{2n} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} & & a_{3n} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & a_{n3} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

- $-a_{ij}$ は行列Aのi行目j列目の要素
- a₁ α のように添え字の間にカンマを入れる場合もあり
- 上記の式で求めたい**未知変数は** x_i

情報数学C (GC21601)

7

今回の講義内容

- 今日の問題
- 数学での解き方とガウス消去法
- ピボット選択
- LU分解とコレスキー分解

情報数子C (GC21001)

Q

数学での解き方は?

n元線形連立方程式の数学での解き方

Ax = bで求めたいのはx (xはベクトルということに注意)

$$\boldsymbol{x} = A^{-1}\boldsymbol{b}$$

逆行列の公式

$$A^{-1} = \frac{1}{|A|} \operatorname{adj}(A)$$

- |A|は行列式 ⇒ 逆行列の存在条件|A| ≠ 0
- adj(A)は余因子行列

^{y」} 行列式はdet(A) i+j_A... と書くことも

 $\operatorname{adj}(A)|_{ij} = (-1)^{i+j} \Delta_{ji}$

 Δ_{ji} は行列Aからj行i列を除いたn-1 imes n-1の行列の**行列式**

情報数学C (GC2160

数学での解き方は?

n元線形連立方程式の数学での解き方

 $x = A^{-1}b$ に前のページの式を代入すると

$$x = \frac{1}{|A|} \begin{pmatrix} \Delta_{11} & -\Delta_{21} & \dots & (-1)^{n+1} \Delta_{n1} \\ -\Delta_{12} & \Delta_{22} & \dots & (-1)^{n+2} \Delta_{n2} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ (-1)^{1+n} \Delta_{1n} & (-1)^{2+n} \Delta_{2n} & \dots & \Delta_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix}$$

なんだかんだと整理するとxの各要素xiは

$$x_i = \frac{1}{|A|} \begin{vmatrix} a_{11} & \cdots & a_{1,i-1} & b_1 & a_{1,i+1} & \cdots & a_{1n} \\ a_{21} & \cdots & a_{2,i-1} & b_2 & a_{2,i+1} & \cdots & a_{2n} \\ \vdots & & \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{n1} & \cdots & a_{n,i-1} & b_n & a_{n,i+1} & \cdots & a_{nn} \end{vmatrix}$$

クラメルの公式

行列Aのi列目をベクトルbで置き換えた行列の行列式

情報数学C (GC21601

10

数学での解き方は?

クラメルの公式で解けるならば**数値計算はいらない**のでは?

⇒ この方法は**計算時間的に現実的ではない**

行列式計算に $\frac{-1}{2}$ で使ったときの計算回数: $(n-1) \times n!$ 回の乗算とn! 回の加算

最新のCPU(1.5Tflops程度*)で計算したとして...

. 17/	別のOFO(1.5THOPS対主及)で計算のCCOで						
	n	演算回数	理論的な計算時間	吸の計算に			
	10	3,628,800	約0.0000024秒	実際がない!			
	20	約2.43×10 ¹⁸	約1.62×10 ⁶ 秒=約19日	は使ん			
	30	約2.65×10 ³²	約1.76×10 ²⁰ 秒=約5.6兆年				

*flopsは1秒あたりの浮動小数点演算可能回数、サーバ用のXeon Phi で最高 4Tflopsぐらい、GPUならもう一桁上だが実際の問題では $n=10^6$ とかもよくある。 11

計算量のオーダについて

計算量のだいたいの目安を示すために $O(n^2)$

といった表し方を使う.

- 読み方は**オーダ** (上の例なら"nの2乗のオーダ")
- あくまで絶対的な計算量ではなく**要素数に対する 計算量の増減**を表すもの

例) 計算量 n^2 と $3n^2$, n(n-1)はどれも $O(n^2)$

- 挿入ソートで $O(n^2)$, クイックソートで $O(n \log n)$, O(n!)は巡回セールスマン問題を総当たりで解く場合 (前ページの計算量は $O(n \cdot n!)$) $\rightarrow \frac{2O(n+1)}{2}$ 量については付録参照

学C (GC21601) 12

数値計算手法のための行列の性質

効率的な計算方法を知るための**行列の性質**の復習

ある行/ある列を入れ替えられる

$$\begin{cases} x + 2y = 3 \\ 4x + 5y = 6 \end{cases}$$
 或の順番 = 行の入れ
$$\begin{cases} 1 - 2 \\ 4 - 5 \end{cases} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 \\ 6 \end{pmatrix}$$

- 連立方程式で式や変数の順番を変えても解は変わらない
- 行列Aの要素だけでなく右辺項bの要素も入れ替えなければならないことに注意(逆に右辺ベクトルと左辺の列は入れ替えられない)
- 行の入れ替えなら(x, y)の順番は変わらないけど,
 列の入れ替えでは(x, y)の**順番が変わる**ので注意

情報数学C (GC21601)

13

数値計算手法のための行列の性質

効率的な計算方法を知るための**行列の性質**の復習

• 任意の**行だけスカラー倍**できる

$$x + 2y = 3$$
$$4x + 5y = 6$$

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 4 & 5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 \\ 6 \end{pmatrix}$$

解は同じ

$$\begin{cases} 3 \times (x + 2y) = 3 \times 3 \\ 4x + 5y = 6 \end{cases}$$

$$\begin{pmatrix} 3 & 6 \\ 4 & 5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 9 \\ 6 \end{pmatrix}$$

方程式の**両辺に同じ定数を掛けても解は変わらない**. こちらは行だけで列は×

数値計算手法のための行列の性質

効率的な計算方法を知るための**行列の性質**の復習

• スカラー倍した行を**別の行と足し引き**できる

$$\begin{cases} 4 \times (x + 2y) = 3 \times 4 \\ 4x + 5y = 6 \end{cases}$$

$$\begin{pmatrix} 4 & 8 \\ 4 & 5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 12 \\ 6 \end{pmatrix}$$

上の式を4倍して下の式を引く

$$\begin{cases} 4x + 8y = 12 \\ 3y = 6 \end{cases}$$

$$\begin{pmatrix} 4 & 8 \\ 0 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 12 \\ 6 \end{pmatrix}$$

加減法と呼ばれる解法で使われる演算 行列としては**非対角成分が**0になっていることが重要

情報数学C (GC21601

15

加減法を用いた解き方

加減法で連立方程式を解いてみよう! 数学で逆行列を使わないでも連立方程式を解いていた ことを思いだそう ⇒ 加減法,代入法

加減法の手順(2元連立方程式の場合)

1. 片方の式に実数を掛けて係数を合わせて加減算する

2. 結果を式に代入して、もう一つの解を得る $x+3\times2=6$ \longrightarrow x=0

情報数学C (GC21601

16

ガウスの消去法

加減法を行列で表現したAx = bに適用してみよう (ただし, **ある決まった手順**でできるようにする)

手順1:片方の式に実数を掛けて係数を合わせて加減算

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 6 \end{pmatrix}$$

√ 1行目を2で割って、2行目から引く

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ \mathbf{0} & 2.5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 5 \end{pmatrix}$$

 \Rightarrow 1行目に a_{21}/a_{11} を掛けて、2行目から引く $(a_{21}(左下非対角成分)$ が0になるようにする)

ガウスの消去法

手順2:結果を式に代入して、もう一つの解を得る

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 0 & 2.5 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 5 \end{pmatrix}$$

√ 2行目を2.5で割る

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \end{pmatrix}$$
 :この時点で $x_2 = 2$
↓ 1行目に代入

 \Rightarrow 2行目を a_{22} で割って、 $x_1 = \frac{b_1 - a_{12}x_2}{a_{11}}$ を計算

ガウスの消去法

 $n \times n$ に拡張してみよう

C言語のコードとの対応をとるために

- インデックス0スタート $(a_{11} \sim a_{nn} \Rightarrow a_{0,0} \sim a_{n-1,n-1})$
- 右辺項をn列目として表記 $(b_1 \sim b_n \Rightarrow a_{0,n} \sim a_{n-1,n})$

$$\begin{pmatrix} a_{0,0} & a_{0,1} & a_{0,2} & & a_{0,n-1} \\ a_{1,0} & a_{1,1} & a_{1,2} & \dots & a_{1,n-1} \\ a_{2,0} & a_{2,1} & a_{2,2} & & a_{2,n-1} \\ & \vdots & & \ddots & \vdots \\ a_{n-1,0} & a_{n-1,1} & a_{n-1,2} & \dots & a_{n-1,n-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_{n-1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{0,n} \\ a_{1,n} \\ a_{2,n} \\ \vdots \\ a_{n-1,n} \end{pmatrix}$$

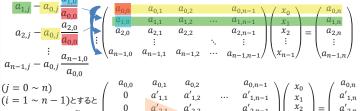
右辺までまとめ $T_n \times (n+1)$ の行列にしたものを**拡大行列**という

$$\begin{pmatrix} a_{0,0} & a_{0,1} & a_{0,2} & & a_{0,n-1} & a_{0,n} \\ a_{1,0} & a_{1,1} & a_{1,2} & \dots & a_{1,n-1} & a_{1,n} \\ a_{2,0} & a_{2,1} & a_{2,2} & & a_{2,n-1} & a_{2,n} \\ \vdots & \ddots & \vdots & \vdots \\ a_{n-1,0} & a_{n-1,1} & a_{n-1,2} & \dots & a_{n-1,n-1}a_{n-1,n,n} \end{pmatrix}$$

情報数学C (GC21601)

ガウスの消去法

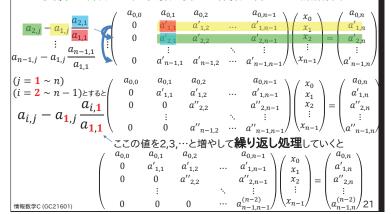
手順1:片方の式に実数を掛けて係数を合わせて加減算する \Rightarrow 1行目に a_{10}/a_{00} を掛けて、2行目から引く $(a_{10}($ **左下非対角成分**)が0になるようにする)



$$(i=1\sim n-1)$$
とすると $a_{i,j}-a_{0,j} = a_{0,0}$ $a_{0,0}$ $a_{0,0}$

ガウスの消去法

手順1:片方の式に実数を掛けて係数を合わせて加減算する



ガウスの消去法

手順1:片方の式に実数を掛けて係数を合わせて加減算する

[1列目]
$$a_{i,j} - a_{0,j} \frac{a_{i,0}}{a_{0,0}}$$
[2列目]
 $a_{i,j} - a_{1,j} \frac{a_{i,1}}{a_{1,1}}$ $[n-1列目]$
 $a_{i,j} - a_{n-2,j} \frac{a_{i,n-2}}{a_{n-2,n-2}}$ $(i = 1 \sim n-1)$
 $(j = 0 \sim n)$ $(i = 2 \sim n-1)$
 $(j = 1 \sim n)$ $(i = n-1 \sim n-1)$
 $(j = n-2 \sim n)$

赤字のところをkとして一つの式にまとめると: $(k = 0 \sim n - 2)$ $(i = k + 1 \sim n - 1)$

前進消去

実際の計算では左下部分の計算は必要ない(Oになるということ は分かっている)ので、 $j = k + 1 \sim n$ でよい.

ガウスの消去法

手順1:前進消去のコード例

行列のサイズを $n \times n$ として、2次元配列A[n][n+1]に 拡大行列の要素が格納されているとする.

j=kから反復処理すると左下部分が0になるかを確認できるが、j=kの ときにA[i][k]=A[i][j]として値が更新されてしまい、誤った解となるので、jのfor文の前にその値をそれぞれ変数に退避して使った方が良い (サンプルプログラム参照)

ガウスの消去法

手順1:前進消去の実行結果例

 $\mathfrak{M}(x_0, x_1, x_2) = (1, -2, 3)$ 2 1 2.5 0.5 -3.5 0 2.5 -1.5 -9.5

2 1 左下部分がすべて 2.5 0.5 -3.5 0になっている

ガウスの消去法

手順2:結果を式に代入して、もう一つの解を得る

$$\Rightarrow$$
 2行目を a_{11} で割って, $x_0 = \frac{b_0 - a_{01}x_1}{a_{00}}$ を計算

$$\begin{pmatrix} a_{0,0} & a_{0,1} & a_{0,2} & & a_{0,n-1} \\ 0 & a'_{1,1} & a'_{1,2} & \dots & a'_{1,n-1} \\ 0 & 0 & a''_{2,2} & & a''_{2,n-1} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \dots & a_{n-1,n-1}^{(n-2)} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_{n-1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{0,n} \\ a'_{1,n} \\ a''_{2,n} \\ \vdots \\ a_{n-1,n}^{(n-2)} \end{pmatrix}$$
 下から上へ 計算 $(n-177)$ から0行へ)

$$[n-1行目] a_{n-1,n-1} x_{n-1} = a_{n-1,n} \implies x_{n-1} = \frac{a_{n-1,n}}{a_{n-1,n-1}}$$

$$[n-2行目] \ a_{n-2,n-2}x_{n-2} + a_{n-2,n-1}x_{n-1} = a_{n-2,n}$$

注) 下の式ではダッシュは省略 している $(a'_{i,j} \Rightarrow a_{i,j}$ と記述)

既知
$$\implies x_{n-2} = \frac{a_{n-2,n} - a_{n-2,n-1} x_{n-1}}{a_{n-2,n-2}}$$

ガウスの消去法

手順2:結果を式に代入して,もう一つの解を得る

$$[n-1行目] \quad x_{n-1} = \frac{a_{n-1,n}}{a_{n-1,n-1}}$$

$$[n-2行目] \quad x_{n-2} = \frac{a_{n-2,n} - a_{n-2,n-1} x_{n-1}}{a_{n-2,n-2}}$$

$$[n-3行目] \quad x_{n-3} = \frac{a_{n-3,n} - a_{n-3,n-2} x_{n-2} - a_{n-3,n-1} x_{n-1}}{a_{n-3,n-3}}$$

$$\vdots$$

$$[0行目] \quad x_0 = \frac{a_{0,n} - a_{0,1} x_1 - a_{0,2} x_2 - \dots - a_{0,n-1} x_{n-1}}{a_{0,0}}$$

$$i行目(赤字),j列目(青字) として一つの式にまとめると:$$

$$a_{i,n} - \sum_{j=i+1}^{n-1} a_{i,j} x_j \qquad (i=n-1 \sim 0)$$

[*i*行目]
$$x_i = \frac{a_{i,n} - \sum_{j=i+1}^{n-1} a_{i,j} x_j}{a_{i,i}}$$
 $(i = n-1 \sim 0)$

ガウスの消去法

手順2:結果を式に代入して、もう一つの解を得る

$$x_{n-1} = \frac{a_{n-1,n}}{a_{n-1,n-1}}$$

$$x_i = \frac{a_{i,n} - \sum_{j=i+1}^{n-1} a_{i,j} x_j}{a_{i,i}} \qquad (i = n - 2 \sim 0)$$

後退代入

前進消去→後退代入の手順で線形システムを解く方法 ⇒ ガウスの消去法

ガウスの消去法

手順2:後退代入のコード例

実際のプログラムでは \mathbf{k}_{i} を $\mathbf{k}_{i,n}$ に格納していくとすると

$$a_{i,n} = \frac{a_{i,n} - \sum_{j=i+1}^{n-1} a_{i,j} a_{j,n}}{a_{i,i}} \qquad (i = n-2 \sim 0)$$
// &\(&\(\text{k}(\) \) back substitution)
$$A[n-1][n] = A[n-1][n]/A[n-1][n-1];$$
for (int i = n-2; i >= 0; --i){
 double ax = 0.0;
 for (int j = i+1; j < n; ++j){
 ax += A[i][j]*A[j][n]; // \(\Sim \frac{1}{2} \) \(\Delta \)

ガウスの消去法

手順2:後退代入の実行結果例

$$\begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 \\ 1 & 3 & 2 \\ 3 & 4 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 9 \\ 1 \\ 4 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{前進消去後0}} \begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 & 9 \\ 0 & 2.5 & 0.5 & -3.5 \\ 0 & 0 & -2 & -6 \end{pmatrix}$$
解) $(x_0, x_1, x_2) = (1, -2, 3)$



解が $a_{i,n}$ に格納さ

29

ガウスの消去法

ガウスの消去法の演算回数

前進消去 |後退代入| $(i = n - 2 \sim 0)$ $(k = 0 \sim n - 2)$ $(i = \widehat{k} + 1 \sim n - 1)$ $(j = i + 1 \sim n - 1)$ の2重ループ $(j = k + 1 \sim n)$ の3重ループ $\overline{\Box}$ $\frac{1}{3}O(n^3)$

ほぼ正確な解が得られるが,

計算時間的にはあまり良くない

- ⇒ 前計算可能ならLU分解
- ⇒ 近似値でいいなら反復解法(次週)

今回の講義内容

- 今日の問題
- 数学での解き方とガウス消去法
- ピボット選択
- LU分解とコレスキー分解

情報数学C (GC21601)

ガウスの消去法の問題

ガウスの消去法にはコンピュータで計算する上で 致命的な問題がある!

前進消去の式をもう一度見てみよう!

$$a_{i,j} - a_{k,j} = a_{i,k}$$
 $a_{i,k}$
 a_{i

もし, $a_{k,k}=0$ だったら…

- 対角成分が0だと「ゼロで割る」(ゼロ割)が発生!
- ゼロでなくても非対角成分に比べてとても小さいと 引き算で**桁落ち**が生じる可能性も...

ピボット選択

行列の性質を上手く使ってこの問題を解決しよう!

ある行/ある列を入れ替えられる

$$\begin{cases} 2y = 3 \\ 4x + 5y = 6 \end{cases}$$
 式の順番 = 行の入れ ($\begin{bmatrix} 0 & -2 \\ 4 & 5 \end{bmatrix}$ ($\begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix}$ == ($\begin{bmatrix} 3 \\ 6 \end{bmatrix}$) このままだと $k = 0$ で: $a'_{i,j} = a_{i,j} - a_{0,j} \frac{a_{i,0}}{0}$ ゼロ割!

1行目と2行目を入れ替えてから処理すれば、

$$\binom{4}{0} \ \ \frac{5}{2} \binom{x}{y} = \binom{6}{3} \qquad a'_{i,j} = a_{i,j} - a_{0,j} \frac{a_{i,0}}{4}$$

問題なし

ピボット選択

行列の性質を上手く使ってこの問題を解決しよう! 対角成分が0もしくはその絶対値が非常に小さい場合, その行を**絶対値が大きい別の行や列と入れ替える**

⇒ ピボット選択/ピボッティング

- 部分的ピボッティング: 行の入れ替えのみ行う ⇒未知ベクトル $(x_0, x_1, ..., x_{n-1})$ の入れ替えなし
- **完全ピボッティング**: 行と列の両方で入れ替えを
 - ⇒未知ベクトル $(x_0, x_1, ..., x_{n-1})$ の入れ替えあり

ピボット選択

ピボット選択の手順(部分的ピボッティング)

前進消去のk回目の反復において

- i = k + 1からnまでで $|a_{i,k}|$ が最大の行pを探索
- もし, $p \neq k$ ならば,p行目とk行目を入れ替え

前進消去の過程で $a_{k,k}=0$ となることもあるので, 「前計算でピボット交換した後に前進消去」ではなく、 前進消去の**毎ステップ**で $k+1 \sim n$ 行を調べる必要 がある

ピボット選択

ピボット選択付きの前進消去のコード例

```
void Pivoting(vector< vector<double> > &A, int n, int k){
    // k行目以降でk列目の絶対値が最も大きい要素を持つ行を検索
    // k行日以降でk列目の紀列恒が取も入さい要素を持つ行を快業
int p = k; // 絶対値が最大の行
double am = fabs(A[k][k]);// 最大値
for(int i = k+1; i < n; ++i){
    if(fabs(A[i][k]) > am){ p = i; am = fabs(A[i][k]); }
    ıf(k != p) swap(A[k], A[p]); // k != pならば行を交換(ピボット選択)
```

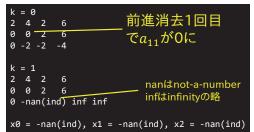
情報数学C (GC21601)

ピボット選択

ピボット選択しなかった場合の結果例

$$\begin{pmatrix} 2 & 4 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \\ 4 & 6 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 6 \\ 9 \\ 8 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{tx} + f \to 0} \underbrace{ \begin{cases} 2 & 4 & 2 & 6 \\ 1 & 2 & 3 & 9 \\ 4 & 6 & 2 & 8 \end{cases} }$$

$$\mathfrak{M}(x_0, x_1, x_2) = (2, -1, 3)$$



ピボット選択した場合の結果例

$$\begin{pmatrix} 2 & 4 & 2 \\ 1 & 2 & 3 \\ 4 & 6 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_0 \\ x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 6 \\ 9 \\ 8 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{ix} + 779, \text{ fig. }} \begin{pmatrix} 2 & 4 & 2 & 6 \\ 1 & 2 & 3 & 9 \\ 4 & 6 & 2 & 8 \end{pmatrix}$$

ピボット選択

解)
$$(x_0, x_1, x_2) = (2, -1, 3)$$

```
      k = 0
      1行目と2行目入れ替え後

      4 6 2 8
      前進消去

      0 0.5 2.5 7
      前進消去

      0 1 1 2
      2行目と3行目入れ替え後

      k = 1
      2行目と3行目入れ替え後

      4 6 2 8
      前進消去

      0 1 1 2
      0 0 2 6

      x0 = 2, x1 = -1, x2 = 3
```

情報数学C (GC21601)

青報数学C (GC21601

ガウス・ジョルダン法

ガウスの消去法を使った逆行列計算

⇒ 逆行列そのものを求める計算に使えないか?

$$Ax = b$$
 ベクトル x , b を行列 X と単位行列 I に置き換え $AX = I$ $A^{-1}AX = A^{-1}I$ $IX = A^{-1}$ X の係数行列を**単位行列**にすると 右辺が逆行列になる

青報数学C (GC21601

39

ガウス・ジョルダン法

拡大行列を使って考えてみる

$$AX = I \underset{\overline{\$}}{\Longrightarrow} \begin{pmatrix} a_{0,0} & a_{0,1} & \cdots & a_{0,n-1} & 1 & 0 & \cdots & 0 \\ a_{1,0} & a_{1,1} & \cdots & a_{1,n-1} & 0 & 1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n-1,0} & a_{n-1,1} & \cdots & a_{n-1,n-1} & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

$$IX = A^{-1} \underset{\text{$\frac{1}{2}$}}{\Longrightarrow} \left(\begin{smallmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 & a'_{0,0} & a'_{0,1} & \cdots & a'_{0,n-1} \\ 0 & 1 & \cdots & 0 & a'_{1,0} & a'_{1,1} & \cdots & a'_{1,n-1} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 1 & a'_{n-1,0} & a'_{n-1,1} & \cdots & a'_{n-1,n-1} \\ \end{smallmatrix} \right)$$

ガウスの消去法を拡張して逆行列を求める: **ガウス・ジョルダン法**

情報数学C (GC21601)

ガウス・ジョルダン法

ガウス・ジョルダン法の手順

ガウスの消去法の拡張:

- 基本的には $n \times 2n$ 行列によるガウスの消去法
- *i,j*の範囲が*k* + 1 ~になっていたが,これを すべての要素に拡張する

 $(i = 0 \sim n - 1, j = 0 \sim 2n - 1)$

- **対角要素を1**にするための処理を追加
- 前進消去のみ

ガウス・ジョルダン法

ガウス・ジョルダン法の手順

$$a'_{i,j} = a_{i,j} - a_{k,j} \frac{a_{i,k}}{a_{k,k}}$$
 $(i \neq k)$ $(k = 0 \sim n - 1)$
 $(i = 0 \sim n - 1)$
 $(j = 0 \sim 2n - 1)$

$$a'_{i,j} = \frac{a_{i,j}}{a_{i,i}} \quad (i = k)$$

赤字: ガウスの消去法と違う部分

学C (GC21601)

ガウス・ジョルダン法

ガウス・ジョルダン法の手順

$$\begin{bmatrix} k = 0 \end{bmatrix} \quad \begin{pmatrix} 1 & a'_{0,1} & \cdots & a'_{0,n-1} \\ 0 & a'_{1,1} & \cdots & a'_{1,n-1} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & a'_{n-1,1} & \cdots & a'_{n-1,n-1} \\ \end{pmatrix} \quad \begin{matrix} -a_{k,n}a_{1,0}/a_{0,0} & \cdots \\ -a_{k,n}a_{1,0}/a_{0,0} & \cdots \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 1 & \cdots & a''_{1,n-1} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & a''_{n-1,n-1} \\ \end{matrix}$$

i,jが0 ~なのでk=1の段階で**1行目も含んだ部分が単位行列**になっていることに注意



対角要素を1にするために最後の行(n-1)まで処理する

情報数学C (GC21601)

ガウス・ジョルダン法

ガウス・ジョルダン法のコード例

拡大行列 $A(n \times 2n)$ は初期化済みとする(左半分が単位行列)

ガウス・ジョルダン法

ガウス・ジョルダン法の実行例

$$A = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 \\ 1 & 3 & 2 \\ 3 & 4 & 3 \end{pmatrix} \Longrightarrow_{\begin{subarray}{c} \pm 510 \\ \hline 520 \end{subarray}} \begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 3 & 2 & 0 & 1 & 0 \\ 3 & 4 & 3 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

解)
$$A^{-1} = \begin{pmatrix} -0.1 & -0.9 & 0.7 \\ -0.3 & 0.3 & 0.1 \\ 0.5 & 0.5 & -0.5 \end{pmatrix}$$

解が合っているかは $A^{-1}A = I$ となるかで確認できる

青報数学C (GC21601)

今回の講義内容

- 今日の問題
- 数学での解き方とガウス消去法
- ピボット選択
- LU分解とコレスキー分解

情報数学C (GC21601

45

数学C (GC21601)

三角分解

ガウスの消去法はAx = bで、 $A \ge b$ どちらの要素が一つでも変化したら1から再計算になる

実際の問題に当てはめた場合, Aがその系(システム) を表し, bが外部からの影響を表す

⇒ システムは変わらないのに外部からの影響が 変わるたびに再計算するのは**非効率**

Aが変わらず, bだけが変わった時に一部の再計算だけで済ませられないか?

三角分解

LU分解

LU分解

三角分解でも最も基本的なもの

LU分解の考え方

Ax = bの行列AがLとUの二つの行列に分解できるとする

$$L = \begin{pmatrix} l_{0,0} & 0 & 0 & & 0 \\ l_{1,0} & l_{1,1} & 0 & \cdots & 0 \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix}$$

下三角行列

右上の非対角成分が すべて0の行列 (Lower triangle matrix)

$$U = \begin{pmatrix} 1 & u_{0,1} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ 0 & 0 & 1 & u_{2,n-1} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

上三角行列

対角成分が1で左下の非対 角成分がすべて0の行列 (**U**pper triangle matrix) 4

情報数学C (GC21601)

LU分解

LU分解の考え方

元の線形システムAx = bを二つの線形システム に分解できた!

これの何が良いのか?

情報数学C (GC21601)

LU分解

それぞれの計算回数を考えてみよう!

[1行目]

$$l_{0,0}y_0 = b_0$$
 \Rightarrow $y_0 = b_0/l_{0,0}$ で簡単に求まる

$$l_{1,0}y_0 + l_{1,1}y_1 = b_1 \Longrightarrow y_1 = (b_1 - l_{1,0}y_0)/l_{1,1}$$

y₀がもう分かっているのでこれも計算は簡単

LU分解

それぞれの計算回数を考えてみよう!

$$\sum_{j=0}^{i-1} l_{i,j} y_j + l_{i,i} y_i = b_i \quad \implies \quad y_i = \left(b_i - \sum_{j=0}^{i-1} l_{i,j} y_j \right) / l_{i,i}$$

i = 0からn - 1まで順番に計算すればvを求めることができる. ガウスの消去法における「後退代入」と同じ手順(順番が逆)

計算時間: $\frac{1}{2}O(n^2)$

LU分解

それぞれの計算回数を考えてみよう!

LU分解

それぞれの計算回数を考えてみよう!

$$\begin{bmatrix}
Ux = y
\end{bmatrix}
\begin{pmatrix}
1 & u_{0,1} & u_{0,2} & \dots & u_{0,n-1} \\
0 & 1 & u_{1,2} & \dots & u_{1,n-1} \\
0 & 0 & 1 & u_{2,n-1} \\
\vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\
0 & 0 & 0 & \dots & 1
\end{pmatrix}
\begin{pmatrix}
x_0 \\
x_1 \\
x_2 \\
\vdots \\
x_{n-1}
\end{pmatrix} = \begin{pmatrix}
y_0 \\
y_1 \\
y_2 \\
\vdots \\
y_{n-1}
\end{pmatrix}$$

$$x_{i} + \sum_{j=i+1}^{n-1} u_{i,j} x_{j} = y_{i} \quad \Rightarrow \quad x_{i} = y_{i} - \sum_{j=i+1}^{n-1} u_{i,j} x_{j}$$

こちらもガウスの消去法における「後退代入」と同じ手順

後退代入

計算時間: $\frac{1}{2}O(n^2)$

LU分解

ガウスの消去法の演算回数

「前進消去」
$$\frac{1}{3}O(n^3)$$
 [後退代入] $\frac{1}{2}O(n^2)$

LU分解を用いた場合の演算回数

「前進代入」
$$\frac{1}{2}O(n^2)$$
 後退代入 $\frac{1}{2}O(n^2)$

全体の計算時間が $O(n^3)$ から $O(n^2)$ まで**高速化**

(Aが変わらないのなら分解にかかる

時間は前計算として無視できる)

LU分解

$O(n^3)$ と $O(n^2)$ はどれくらい違う?

1000GflopsのCPUで計算したとして...

	n	$O(n^2)$ の理論的な計算時間	$m{o}(n^3)$ の理論的な計算時間
{	10	1×10 ⁻¹⁰ 秒	1×10 ⁻⁹ 秒
	10^{2}	1×10 ⁻⁸ 秒	1×10 ⁻⁶ 秒
	10^{3}	1×10 ⁻⁶ 秒	1×10 ⁻³ 秒
	10^{4}	1×10 ⁻⁴ 秒	1秒
	10^{5}	0.01秒	1000秒
	10^{6}	1秒	106秒=約278時間
	10^{7}	100秒	10°秒=約31.7年

今の計算機で実際の問題を解く場合はこのあたりの解像度/スケール の問題を扱うことが多い(もちろん分野によって異なるが)

情報数学C (GC21601)

LU分解

LU分解の方法

A = LUと下三角行列L, 上三角行列Uの性質を使えば 簡単に求められる

$$A = \begin{pmatrix} \boxed{l_{0,0}} & 0 & 0 & & & 0 \\ \hline{l_{1,0}} & l_{1,1} & 0 & \cdots & 0 \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & \boxed{u_{0,1}} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ 0 & 0 & 1 & u_{2,n-1} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

√ 行列Aの各要素a; 毎の式に展開

LU分解

LU分解の方法

$$A = \begin{pmatrix} \begin{matrix} l_{0,0} & 0 & 0 & & & 0 \\ l_{1,0} & l_{1,1} & 0 & \cdots & 0 \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & u_{0,1} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ 0 & 0 & 1 & u_{2,n-1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

[2行目(a_{1,j})]

$$\begin{aligned} a_{1,0} &= l_{1,0} \\ a_{1,1} &= l_{1,0} u_{0,1} + l_{1,1} \end{aligned}$$

$$v$$
 $u_{0,1}, l_{1,0}$ は既知なので $l_{1,1} = a_{1,1} - l_{1,0}u_{0,1}$

(赤と青で示したのは計算済みで既知の要素,

枠で示したのはこのステップでの計算対象)

$$a_{1,2} = l_{1,0}u_{0,2} + l_{1,1}u$$

$$a_{1,2}=l_{1,0}u_{0,2}+l_{1,1}u_{1,2}$$
 🖒 $u_{0,2},l_{1,0},l_{1,1}$ は既知なので $u_{1,2}=rac{a_{1,2}-l_{1,0}u_{0,2}}{l_{1,1}}$

$$a_{1,3} = l_{1,0}u_{0,3} + l_{1,1}u_{1,3}$$
:

$$a_{1,3} = l_{1,0}u_{0,3} + l_{1,1}u_{1,3}$$
 は既知なので $u_{1,3} = \frac{a_{1,3} - l_{1,0}u_{0,3}}{l_{1,1}}$

LU分解

LU分解の方法

$$A = \begin{pmatrix} l_{0,0} & 0 & 0 & & & 0 \\ l_{1,0} & l_{1,1} & 0 & \cdots & 0 \\ \hline l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & u_{0,1} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ 0 & 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

(赤と青で示したのは計算済みで既知の要素, 枠で示したのはこのステップでの計算対象)

[3行目 $(a_{2,j})$]

$$a_{2,0} = l_{2,0}$$

$$\Rightarrow l_{2,0} = a_{2,0}$$

$$a_{2,1} = l_{2,0}u_{0,1} + l_{2,1}$$

$$a_{2,2} = l_{2,0}u_{0,2} + l_{2,1}u_{1,2} + l_{2,2}$$

$$\Rightarrow \ \, \boldsymbol{l_{2,2}} = a_{2,2} - l_{2,0}u_{0,2} - l_{2,1}u_{1,2}$$

$$a_{2,3} = l_{2,0}u_{0,3} + l_{2,1}u_{1,3} + l_{2,2}u_{2,3}$$

$$u_{2,3} = \frac{a_{2,3} - l_{2,0} u_{0,3} - l_{2,1} u_{1,3}}{l_{2,3}}$$

$$a_{2,4} = l_{2,0}u_{0,4} + l_{2,1}u_{1,4} + l_{2,2}u_{2,4}$$

$$u_{2,4} = \frac{u_{2,4} - \iota_{2,0} u_{0,4} - \iota_{2,1} u_{1}}{l_{2,2}}$$

|| このように1行ずつ展開式を評価していけば,L,Uは計算できる!

57

LU分解

LU分解の計算手順

1. 処理行をiとして,以下を $i=0\sim n-1$ で繰り返し $(i=0)^{i+1}$ 行目)

$$a.$$
 $j=0 \sim i \circ l_{i,j}$ を計算 $(i \geq j)$

$$l_{i,j} = a_{i,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} u_{k,j}$$

b.
$$j = i + 1 \sim n - 1$$
で $u_{i,j}$ を計算 $(i < j)$

$$u_{i,j} = \frac{a_{i,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} u_{k,j}}{l_{i,i}}$$

LU分解

LU分解のコード例

```
for(int i = 0; i < n; ++i){</pre>
      L[i][j] = lu;
      // u_ijの計算(i < j)
for(int j = i+1; j < n; ++j){
    double lu = A[i][j];
    for(int k = 0; k < i; ++k){
        lu -= L[i][k]*U[k][j];
                                                                   u_{i,j} = \frac{a_{i,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} u_{k,j}}{\cdot}
              .
U[i][j] = lu/L[i][i];
```

LU分解

LU行列の格納方法

$$L = \begin{pmatrix} l_{0,0} & 0 & 0 & & & 0 \\ l_{1,0} & l_{1,1} & 0 & & \cdots & 0 \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix}, \qquad U = \begin{pmatrix} 1 & u_{0,1} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ 0 & 1 & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ 0 & 0 & 1 & u_{2,n-1} \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

0や1の部分まで格納するのは無駄では?

□ 一つの行列(一つの2次元配列) に**まとめて格納**

$$\begin{pmatrix} l_{0,0} & u_{0,1} & u_{0,2} & u_{0,n-1} \\ l_{1,0} & l_{1,1} & u_{1,2} & \cdots & u_{1,n-1} \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & u_{1,n-1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix}$$

情報数学C (GC21601)

LU分解

LU分解のコード例(1つの行列にまとめたバージョン)

コレスキー分解

LU分解でAが正定値対称行列*ならば、

$$A = LL^T$$

と分解できる ⇒ コレスキー分解

コレスキー分解の式

$$l_{j,j} = \sqrt{a_{j,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{j,k}^2} \qquad l_{i,j} = \frac{a_{i,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} l_{j,k}}{l_{j,j}} \quad (i > j)$$

*正定値対称行列:対称でその固有値がすべて正の行列 6221601)

コレスキー分解式の導出

下三角行列Lを以下とする.

$$L = \begin{pmatrix} l_{0,0} & 0 & 0 & & 0 \\ l_{1,0} & l_{1,1} & 0 & \cdots & 0 \\ l_{2,0} & l_{2,1} & l_{2,2} & & 0 \\ & \vdots & & \ddots & \vdots \\ l_{n-1,0} & l_{n-1,1} & l_{n-1,2} & \cdots & l_{n-1,n-1} \end{pmatrix}$$

 $A = LL^T$ の各要素は以下となる.

$$a_{i,j} = \sum_{k=0}^{j} l_{i,k} l_{j,k}$$

Lは左下しか要素がないので,kが $0 \sim n-1$ でなく $0 \sim i$ までになっていることに注意

情報数学C (GC2160

64

コレスキー分解式の導出

i = jの場合とi > jの場合で式を分ける

$$i = j$$

$$a_{j,j} = \sum_{k=0}^{j-1} l_{j,k}^2 + l_{j,j}^2$$

$$a_{i,j} = \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} l_{j,k} + l_{i,j} l_{j,j}$$

$$l_{j,j} = \sqrt{a_{j,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{j,k}^2}$$

$$l_{i,j} = \frac{a_{i,j} - \sum_{k=0}^{j-1} l_{i,k} l_{j,k}}{l_{j,j}}$$

どちらも右辺に未知数を含んでいないか? $\Rightarrow i = 0$ から順番に解いていけば問題なし

コレスキー分解の手順

j=0から順番に解いていく

$$j = 0: \ l_{0,0} = \sqrt{a_{0,0}}, \qquad \qquad l_{i,0} = \frac{a_{i,0}}{l_{0,0}} \quad (i > j)$$

$$j = 1: \ l_{1,1} = \sqrt{a_{1,1} - l_{1,0}^2}, \qquad \qquad l_{i,1} = \frac{a_{i,1} - l_{i,0}l_{1,0}}{l_{1,1}} \quad (i > j)$$

$$j = 2: \ l_{2,2} = \sqrt{a_{2,2} - l_{2,0}^2 - l_{2,1}^2}, \qquad l_{i,2} = \frac{a_{i,2} - l_{i,0}l_{2,0} - l_{i,1}l_{2,1}}{l_{2,2}}$$

$$\vdots \qquad \qquad \vdots \qquad \qquad \vdots$$

B数学C (GC21601)

66

コレスキー分解

コレスキー分解のコード例

```
for(int j = 0; j < n; ++j){
                // i == jについて解く
                double 1\bar{1} = A[j][j];
               for(int k = 0; k < j; ++k){
    11 -= L[j][k]*L[j][k];
               L[j][j] = sqrt(l1);
                // i > jについて解く
                for(int i = j+1; i < n; ++i){
                    11 = A[i][j];
for(int k = 0; k < j; ++k){
    11 -= L[i][k]*L[j][k];</pre>
                     L[i][j] = 11/L[j][j];
          }
情報数学C (GC21601)
```

コレスキー分解

線形システムを解く手順はLU分解と同じ

 $L\mathbf{v} = \mathbf{b}$: 前進代入 $L^T x = v$: 後退代入

LU分解と比べて

- Lを求めるだけなので計算時間は約半分
- 対角成分の計算に平方根が含まれてしまう (平方根の中が負になるとX, さらに計算量も増える)
 - ⇒ 修正コレスキー分解,不完全コレスキー分解 $(A = LDL^T$ と分解)

修正/不完全コレスキー分解の詳細についてはこちらのページ参照 68

今回の講義のまとめ

- 今日の問題: Ax = b
- 数学での解き方とガウス消去法
 - クラメルの公式と計算時間のオーダ
 - 前進消去と後退代入
- ピボット選択
 - ゼロ割を防ぐ方法
 - ガウス・ジョルダン法による逆行列計算
- LU分解とコレスキー分解
 - 三角分解による前計算を使った高速化

69

Appendix

(以降のページは補足資料です)

ライプニッツの公式による行列式計算

 $n \times n$ の行列式det(A)はライプニッツの公式から

$$\det(A) = \sum_{\sigma \in S_n} (\operatorname{sgn}(\sigma) \prod_{i=1}^n a_{i,\sigma_i})$$

式の意味:置換*の成分の積に符号を掛けて足し 合わせたもの

 $\Rightarrow n!$ 通りの総和 で n個の成分の積がn-1回 $\Rightarrow (n-1) \times n!$ 回の乗算

> *置換は簡単に言うと要素を並び替えたもの(厳密な定義ではない) つまり, n!通りの並び替えパターンがあるということ

ランダウ記法と計算量

O(n)などの記法はランダウ記法やO-記法などと呼ばれる. 計算機科 学の分野ではアルゴリズムの計算時間評価のために使われる.

[代表的な計算オーダとその名称]

0(1):定数時間

- $< O(\log(n))$:対数(二分探索など)
- < O(n):線形関数
- $< O(n \log(n))$: 準線形/線形対数時間(ヒープソート,FFTなど)
- $< O(n^2)$:二乗時間(挿入ソート,DFTなど)
- $< O(n^c)$:多項式時間
- ---- 越えられない壁 ----
- $< O(2^n)$:指数時間(最も速い巡回セールスマン問題の厳密解法など)
- < O(n!): 階乗関数(巡回セールスマン問題の可能解を全て列挙して調べるなど)
- $< O(2^{c^n})$:二重指数時間

(定数時間とかの名称はWikipedia準拠)

情報数学C (GC21601)

\sqrt{x} の計算について

 \sqrt{x} に限らず、 $\sin x$ や $\cos x$ なども**テイラー展開**することで,**四則演算** だけで計算できるようになる.

関数f(x)の値aまわりのテイラー展開は:

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(a)}{n!} (x - a)^n$$

 $f^{(n)}$ はn回目の反復ということで はなく、ここではn階微分を表す $f^{(n)}(a) = \frac{d^n f(x)}{dx^n}|_{x=a}$

 $\sqrt{x}=x^{\frac{1}{2}}$ の1階微分は $\frac{1}{2\sqrt{x}}$ なのでa=0まわりでテイラー展開するとゼロ割が起こってしまう、そのため、a=1まわりで展開してみる.

$$\sqrt{x} = 1 + \frac{1}{2}(x-1) - \frac{1}{8}(x-1)^2 + \frac{1}{16}(x-1)^3 - \frac{5}{128}(x-1)^4 + \cdots$$

このようにして平方根も反復計算で求められる. ちなみに一般化二項定理 $((1+x)^{\alpha}=1+\alpha x+rac{\alpha(\alpha-1)}{2!}x^2+\cdots=\sum_{n=0}^{\infty}{\alpha\choose n}x^n)$ を 使っても同様に,

使っても同様に、
$$\sqrt{1+x} = 1 + \frac{1}{2}x - \frac{1}{8}x^2 + \frac{1}{16}x^3 - \frac{5}{128}x^4 + \cdots$$

$$\begin{pmatrix} \binom{\alpha}{n} \text{ id} - \frac{\alpha(\alpha-1)...(\alpha-n+1)}{n!} \\ n \ge 1 \frac{\alpha(\alpha-1)...(\alpha-n+1)}{n!} \end{pmatrix}$$

情報数学C (GC21601) 他にもニュートン法を用いる方法もあるがこれについては第4回目の講義で扱う予定 73

x^r のC言語での計算について

 x^r のC言語(math.h)による実装(pow関数)では

$$x^r = \exp(\log_e x^r) = \exp(r \log_e x)$$

として実数の累乗を計算する.

 $\log x$ や $\exp(x)$ はテイラー展開(マクローニン展開)により以 下のように多項式展開して計算される.

$$\log x = \left(\frac{x-1}{x}\right) + \frac{1}{2} \left(\frac{x-1}{x}\right)^2 + \dots + \frac{1}{n} \left(\frac{x-1}{x}\right)^n + \dots$$
$$\exp(x) = 1 + \frac{x}{1!} + \frac{x^2}{2!} + \dots + \frac{x^n}{n!} + \dots$$

C言語の倍精度(double)の桁数(小数点以下15桁)を得る ためにはn = 18程度は必要!

上記の関数や精度は実際のものと違う可能性があるので注 意(環境によって違うこともある)